

矛と盾が矛盾とならないために

カルビーポテト株式会社 馬鈴薯研究所所長

もり もとゆき
森 元幸

矛（ほこ）は敵を攻撃するためのもの、盾（たて）は反対に敵の攻撃から身を守るためのもの、二つの文字を並べると矛盾（むじゅん）となる。矛盾とは二つの物事が食い違っていて辻つまが合わないことを示し、個々の文字とは異なる意味となる。

研究分野にも、矛と盾が存在する。品種開発は新たなことに挑戦する矛であり、新規用途で需要を拡大し、品質や収量の向上を目指す攻めの役割を果たす。病虫害研究は脅威から守る盾であり、防衛線を設けて病虫害の侵入や拡大を阻止する。この両者が噛み合わないと特定の分野や地域から撤収することになり、矛盾の状態として非難される。2015年にわが国で初めて発生が確認されたジャガイモシロシストセンチュウの対策は、品種開発と病虫害研究が矛と盾の機能を発揮し、相互に補完し役割を果たしている。

一方、バレイショの生産現場と実需加工の関係は、残念ながら矛盾の状況にある。生食用では、圧倒的なブランド力で「男爵薯」がバレイショの代名詞としての地位を築いて来た。ところが1970年代以降、家庭での消費が減退し加工製品や調理済み食品の利用が増加するに従い栽培面積は減少している。「男爵薯」は加工原料としても使用されるが、歩留りの悪さから半加工品を

輸入する誘因ともなっている。「男爵薯」の需要減少は生産者の収益低下を招き、栽培面積が縮小する悪循環サイクルに陥っている。

1976年に登録された「トヨシロ」は、ポテトチップの消費拡大とともに加工原料用の主要品種となった。大面積で栽培され、様々な製品の原料として利用されている。ところが2000年を過ぎて気象変動が激しくなり、夏の暑さに耐えることができない「トヨシロ」に安定多収は望めなくなった。軟腐病など病害が多発し、ジャガイモシストセンチュウの抵抗性も無い。この間に新品種が育成され、耐病虫害性に加え加工適性や収量の安定性も明らかに向上している。生産現場は能力の高い新品種の栽培を望むが、実需加工は「トヨシロ」の偶像を求めて新品種に駄目出しする場面も多い。これは当然でもあり、商品仕様や加工工程などは「トヨシロ」を標準として出来上がっている。「男爵薯」がたどった轍を、再び「トヨシロ」で繰り返すことはできない。高能力の新品種を採用すれば、生産現場ではコストが低下し、実需加工では歩留まりが向上し、消費場面では高品質の製品が適正価格で提供される。日本全体で利益を得るために、業界一丸となって矛盾を解消し、好循環サイクルを回すときと確信する。